

保育場面における発達特性の理解 ～子どもの困りを理解しよう～

講師 岡崎 達也

(公社)京都市児童館学童連盟事務局 主任厚生員 (統合育成担当)

1. はじめに

私は、2年前まで児童福祉センターで30数年間勤務していました。言語聴覚士として療育の仕事をつらだしに、児童相談所や発達相談所で相談業務を経て、最後は管理職として地域支援を担当しました。その時は、市内百数十か所の保育園(所)、幼稚園、認定こども園(以下「園」という)を回っていました。

今は児童館で子どもたちに関わっています。学童にいる支援の必要な子ども、特性を持った子どもを見て思うのは、これまでの子どもへの向き合い方がマッチしている場合としていない場合とで、経過がかなり違うということです。保護者や園時代の先生方も課題を感じながら関わってこられたと思いますが、なぜこんな経過の違いが起こるのか、と考えさせられます。その子どもがきちんと理解されてきていると、子どもの発達はこじれず、良い経過につながると感じています。

児童館では、午前中の乳幼児クラブで保護者相談をやっています。1歳過ぎから関わり、支援していくと明らかな効果があります。特性は変わらないけれどこじれないのです。今日はこの話ではできませんが、乳幼児期の支援をされているみなさんには、子どもたちのことをしっかり理解してサポートしていただきたいと思っています。

2. 事例より

- ・1歳2か月のケース。

朝保育園に来て保護者と離れると大きな声で泣き出す。保育者が抱っこをして遊びに誘ったり、歌を歌うとようやく泣き止む。次の見通しが立たないためだと思われる。特に週初めはなかなか

泣き止めません。また、タライの中で水遊びをしていて、「おしまいにしよう」「シャワーしようか」と声をかけ抱っこするとパニックになる。保育者がシャワーをかけて「気持ちいいね」と言ってホッとさせてあげると少しずつ落ち着いてきます。“まだ遊んでいたかった”というよりは、“場面が変わることで混乱しているのではないか”という保育者の見立ては良い感覚だと思います。この子どもは保護者と別れて“どうなるんだろう”と見通しが立たなかったり、タライの水遊びが終わって、“なにがどうなるのか”と不安になっているでしょう。1歳2か月ですから切り替えがつきにくいことはありますが、こういうことが度々起きると“特性を持っているかもしれない”と考えてみる必要があります。

- ・1歳11か月のケース。

室内をうろうろして棚に入っているおもちゃを片っ端から出したり、口の中に入れて噛み続ける。保育者が「ナイナイしようか」と誘うが、視線が合わない。そこで、落ちているおもちゃを手渡して、カゴを見せるとおもちゃを入れます。言葉掛けでは分からないけれどカゴを見せると気がついたようです。この辺も保育者のセンスが良いと思います。保育者がおもちゃの遊び方を伝え、一緒に遊ぶと少しはやってみますが、すぐにカゴをひっくり返す。遊びが上手く展開できない、遊びが続かないというところから気になる行動が来ているとうかがえます。おもちゃを口に入れるのは、噛む事で気持ちが一定落ち着くためだと思います。マテマテ遊びで追いかけても、前しか見ておらず、保育者が呼びかけても振り返らない。友達や保育者の真似をすることもありません。何

か診断がつくような年齢ではありませんが、対物志向が強く、見えたものに反応してしまい、人を見ないということが問題です。気を付けて見てあげなくてはいけない子どもだと思います。また、食事時間になって名前を読んでも、うろうろしていて食事コーナーに来ません。最終的には保育者が手をつないで食事コーナーに連れてきます。生活の手順や見通しがとらえきれていないと思われま。もちろん1歳代の子どものことなので、理解が不十分だとは思いますが、ルーティンが出来てくると一定動けるようにはなってきますが、なかなか定着はしないでしょう。様々な姿から、見通しが持ちにくいことがうかがい知れます。

・3歳2か月のケース。

この頃になってくると自由遊びの問題がよく出てきます。ままごとをしている所へ行って、おもちゃを無理やり取ったり投げたりする。実はままごとがしたかった訳ではありません。遊べなくて手持無沙汰なので、かまわなくて注目引きをしています。おもちゃを投げて相手の反応を見ているのです。また他の場面では、走り回って友達にちょっかいをかけるので、保育者が遊びのテーマを提供します。これもいい関わり方だと思いますが、なかなか遊びを見つけられません。遊びを上手く見つけられるかどうかは最大の支援となります。普段は“落ち着きのない子だなあ”という印象ですが、いつもと違う行事の場面では、ものすごく不安が高くなって、みんなから外れて固まってしまいます。場面の違いでの不安の高さがこのケースの本筋の問題だと言えます。

・4歳6か月のケース。

他の子どもが積み上げた積み木をゆっくりと壊す。「やめて」と言われハッと気がつく。積み木だけを見ていて、周りの子どもが積んでいる姿など他の所が見えていません。こういう状態を『シングルフォーカス』と言い、特性の一つです。ままごと遊びの場面では、お皿を口に当てて「ヴ～」と車のエンジンのような大きな音を出す。他の子が「うるさいな」と耳をふさいでいても、周りの

様子が見えず、状況判断ができません。お昼寝の時間には、特定の子ともと一緒に寝て、奇声を発し合ったりして寝られない。これは手持無沙汰でやっているのでしょう。発達特性のある場合は、睡眠リズムのコントロールが苦手な人が結構います。

・4歳7か月のケース。

この子は戦いごっこをして走り回っている。先生が戦いごっこをしている子どもを集めて室内遊びのルールを伝えると「わかった」と言うが、またすぐ同じことをする。遊びのイメージの幅が狭く、パターンで遊んでいます。お店屋さんごっこの場面では、お金を払って品物を買おうと、財布の中のお金が無くなってパニックになってしまいました。お金を渡したら品物がもらえるというルールが断片的にしか見えておらず、全体の見通しが立ちにくいために混乱している状況です。混乱するレベルも成長と共に上がってきます。

・6歳3か月のケース。

みんなで集まり話し合いをする時間になると、一番前に座り、先生が話す内容に、逐一反応してずーっと何かしゃべっています。言葉だけでは何を話しているか理解できず、見通しが持ちにくく不安が高い子どもです。先程までの子どもたちより高次元での引っ掛かりになってきますが、例えばカードゲームをする場面では負けを認めません。自分の都合のいいようにルールを変えて負けないようにしようとするので、当然トラブルになります。保育者が仲裁をし、気持ちを聞いたり、他児の気持ちを代弁すると落ち着きますが、また同じことが起こります。想像力が弱く他者視点に立てないという特性からくる姿だと思います。他の場面では、困ってる友達がいたり、友達同士でトラブルがあると、とにかく入って行って部分的な情報だけで介入しようとして話を難しくします。状況を把握せずに、自分がリーダーシップをとろうとするので余計にもめることになります。こういうトラブルは小学生で非常に多いです。全体が見えていないというのが一つのポイントです。

乳児から幼児期の終わりまで、6人の子どもの事例を挙げてみました。引かかるラインはいろいろありますが、遊びが見つけたり広げたりしにくいため、手持ち無沙汰になるといろんなことが起こるといえるところを感じてほしいです。

3. 子どもたちの様々な行動

落ち着きがない、話を聞いてない、友達と遊べない、衝動的な行動(ブレーキがかからない)、相手を攻撃する、遊びが転々と変わる、一方的に話し続ける、パニックになる、かんしゃくをおこす、こういった行動は特性から起こることが多いと言えます。このような行動が問題だと一概には言えませんが、パターンとして起こりやすい状況にあるなら対応を考えなければなりません。

このような子どもが一定の割合で保育場面にあります。今、学童保育は市内で1万4千人くらい利用しており、大体千人くらい支援のいる子がいます。これは保護者が認めている数なので、潜在的にはもっといるでしょう。私も保育現場にたくさん行きましたが、大体1割、多い園だと2割いる状況です。特性によりいろんな行動をとり、少し周りから浮いてしまっています。表面的には明確な障害がないので問題はないように思える子どもたちをきちんと理解していく必要があります。健診でも発達相談でも園の巡回でも見抜けない子どもは結構います。その場合はわがままでしつけができてないと捉えられ、保護者に責任を負わせがちです。すると保護者のストレスが非常に高くなり、子どもに対する誤った対応(押さえつける、怒りまくる)が起こったりします。そのように連鎖していくと最悪は虐待ということになりかねません。児童館で「お前、死ぬ、ボケ」などと暴言を言う子がいます。なぜそのような言葉を言うようになっていくのか考えると、誰かから言われているからです。虐待とまでは言わなくても、不条理な対応を受け続けてくると、子どもからそのような言葉が出てくるということはありません。保護者もストレスがかかっているから、一概に悪い、良いという問題ではなくて、どう手

を差しのべるかということが大切です。

4. 発達特性を考える

事例でも、様々な特異行動をとる子がいましたが、周りからくる情報の捉え方が少し独特なのだと理解する、というのが発達特性を解く視点です。障害という言葉を使うかどうか、実は考えなくてはいけません。一応、行政用語としては『発達障害』という言葉が普及しているので使っていますが、本来は『発達特性のある子』の方が正確なのでしょう。そういう子ども達は、目で見ることが得意ですが、注意が向くところが非常に狭い(シングルフォーカス)、感覚の入りが違う、理解の仕方が非常に独特で自分の気持ちをコントロールするのが苦手、相手の気持ちに気づきにくい、といった特徴を持っています。周りの子が当たり前ということが、その子にとって当たり前ではないのだと捉え、まずその子の特徴を理解することが必要です。そのためには発達特性を理解することが重要になります。

ここから6つほど特性の話をしていきます。

①注意・多動衝動の課題

例えばブランコに乗りたと思った時、たくさんの子供が順番を待っていたらその列の最後尾に並びます。けれどもシングルフォーカスの子供は並んでいる他の子供も見え、直接ブランコに行ってしまう。この時“この子はルール無視をしている”と思ってしまうが、実はブランコ以外のものが全く見えていない(シングルフォーカス)のです。「並んでいるのに！」と怒られても、なぜ自分が怒られているのかよくわからないので、被害感が増します。特性のある子供は、一部を見てしまうと他は紗がかかった状態で見えています。これがシングルフォーカスで、狭く、深く見えます。また、シングルフォーカスには全体ではなく部分で見るという特性があります。例えば同じ大きさのものの周りを、大きいもので囲んだ時と小さいもので囲んだ時、定型発達の子は小さい物で囲まれているものの方を大きく捉えやすい、これは相対的に見ているため

す。シングルフォーカスの傾向が強い場合、その部分だけを見ているため瞬時に同じ大きさだとわかります。定型発達の人が全体を見ているがために気付かない真実や真理に、特性のある人が気付くということも起こりうるかもしれません。ただこういう傾向があると、全体を考えず、部分の方に注意が向きやすくなるので、因果関係、前後関係がとらえにくく、マイルールで解釈してしまうという傾向が出てきます。子どもだけでなく、保護者にもいるので保護者支援の中でも配慮が必要です。

次に、周りの刺激に振り回されやすい不注意という特性です。周りのことが気になるとやることが手につかなくなります。例えば、勉強していても、目に見えるいろいろな物に反応したり、頭の中で様々なことを思い付いて、手につきません。目に見えるものに反応して振り回される場合や、頭の中で思いついたことで考え込んで手につかない場合の両方があります。シングルフォーカスは一つのことに集中し、不注意はあちこちに注意がいくというように、全く反対の特性なのですが、一人の子どもの中でこの二つを持ち合わせる場合があります。さまざまな刺激が周りから入りすぎてコントロールができないために、そのようなことが起こると言われています。

多動性という特性は、動きが止まらない、落ち着きがない、遊びが次々と変わっていくような状況です。また、やたらと話しをするという子もいます。話が止まらないので『話す多動』と言われます。乳幼児はみんな多動だともいえますが、特性の強い子どもの場合は、大きくなってもしっかり落ち着きません。

衝動性は何かを見たらやりたくてしょうがなくなってしまう。「ちょっと今はまずいぞ」とブレーキがかかりません。例えば、興味のあるものを見つけると、車が走っていても飛び出そうとします。もちろん衝動的な傾向も乳幼児にはありますが、ある程度大きくなって、コントロールできず、思い立ったら止まらないのが、特性を持つ子どもです。衝動性も悪い事に思えますが、考

え方を変えればエネルギーがあるとも言えます。

注意の問題、シングルフォーカス、多動性、衝動性は微妙に違いますが、これらの特性を複合的に持っている場合があります。そしてこれから話す想像力の問題や感覚特性の問題が更に絡んできて、困りを強めることが多くなります。ただ乳児の場合はどの子どもその傾向があるのが当たり前なので、あまり小さい子に「落ち着きがない」と言いすぎるのはよくありません。

②感覚特性

感覚には、視覚（見る）、聴覚（聞く）、嗅覚（におい）、味覚（味）、前庭覚（バランス、体が斜めになったり、回っている、揺れている等を感じる感覚）そして触覚（触る）などがあります。触覚には、痛い・暑い・冷たいなども含まれます。残りの一つ、固有受容覚については、後の『③協調運動の課題』で詳しく話します。人間は、このような様々な感覚を駆使して周りの世界を把握していますが、その感じ方のムラが大きいといふところにポイントがあります。非常に敏感に感じてしまう感覚特性（過敏）では、ちょっとした音でも非常に大きく感じます。他の人が気にならない音も、メガホンでの大音量のように聞こえます。その逆で感覚を感じにくい特性があり、これを鈍麻と言います。鈍麻の場合は、その感覚が強くないと感じません。そして鈍い感覚を強く入れると、快の感覚になるため、その感覚を求めようとする子が出てきます。この過敏性と鈍麻性が、極端になってしまうと非常に生活に困ります。例えば、保育現場には沢山の子どもがいて騒がしいのが当たり前ですが、聴覚過敏の子どもはすごくしんどいと感じます。ある園を訪れた時、全園児が集まって誕生会をしていたのですが、一人の子どもがホールから逃げ出して、グラウンドの端っこで砂で遊んでいました。おそらく、たくさんの子どもが集まって騒がしいことがしんどかったのだと思います。このように、発達特性を理解すればその子の行動の意味合いが理解できて、良くないと思える行動も仕方ないことなのだと思えます。好き嫌いも過敏性のために出てくることがあ

ります。例えば、嗅覚が過敏なために、にんじんのにおいが唐辛子のにおいに感じるといった感覚もあります。そうすると一かけらでも排除しようとしみます。食育の観点で「食べさせなければいけない」という考えもありますが、もし感覚特性がある子に食べるのを無理強いすると虐待に近い対応になります。触感が過敏で抱っこや手つなぎをものすごく嫌がる場合は、保護者へのサポートの仕方も考えないといけません。保護者にすれば自分に関わると子どもが泣く訳ですから、すぐつらいことです。よくその子を見て、特性を理解することが必要になってきます。得てして過敏な方が、生活の中で困ることが多いです。

平衡覚の鈍麻性の例として、グルグル回るという行為が良く見られます。何のために回っているのかというと、気持ちがいいからというのが答えになるでしょう。他には、回るもの（換気扇、扇風機など）をずっと見ていたり、手を顔の前に持ってきて振るといったのも刺激が欲しいからやっています。危険でなければ、それ自体を問題行動としてとらえる必要はありませんが、このような行動が出てくることで特性が分かります。鈍い感覚を入れると落ち着くため、感覚を欲することを感覚欲求と言います。通常でも脳を適切に活動させるためには、何らかの感覚欲求が生じます。しかし、特性のある子どもはその感覚欲求のレベルがものすごく高く、強く入れようとしみます。だからうろろしたり、グルグル回ったり、激しい遊びをします。『高い高い』を何十回もせがんだり、グルグル回しても目を回さない子どももいます。また、感覚鈍麻だから強く感覚を欲しがるとばかりではなく、怖がる子もいますので、子どもがどんな反応をするのかよく見て手立てを考えなくてははいけません。

③協調運動の課題

協調運動は身のこなしと言い換えられますが、固有受容覚が関わってきます。固有受容覚とは、筋肉や関節をどの程度動かしているかを感じる感覚で、力加減や手先の細かい動きを調整していて、粗大運動にも微細運動にも影響しています。

この感覚は、生活している中で非常に大切に、感情の安定にも影響しています。固有受容覚が働くことで、スムーズに走れたり、安定して座れますが、協調運動の課題を持っている子どもは、長い時間安定して座れません。態度が悪いのではなく、姿勢が保てないのです。協調運動の獲得が年齢相応に上手くいってなくて学業成績や日常生活に影響を与えている状態を『発達性協調運動障害（DCD）』といい、最近この診断のつく子どもが多くなってきました。『発達性協調運動障害』の場合は脳性麻痺、筋ジストロフィーなど、もともとの別の神経疾患や運動系の疾患がないにもかかわらず、協調運動が上手くいきません。ただ、日常生活上一定のことは出来るので、どこまでそれを診断すべきかというのは考えさせられるところです。この状態になると運動発達が少しずつ遅れたり、発音の問題や生活上の細かい動きが苦手というお子さんが出てきますが、それを努力不足や指導力不足、単なるおっちょこちょいと捉えるのではなく、発達からきていると認識することが必要です。最近では、作業療法士を中心に協調運動の課題について考えられるようになってきました。

④想像性の課題

発達障害の中核に来るのが想像力（イメージネーション）の問題です。次に何が起こるかわからなくて非常に不安になりやすく、見通しが立たないことで切り替えにくかったり、待てなかったり、その裏返しとしてこだわりが出てきます。想像力は目に見えない物事を理解する力ですから、見通しを持ったり、象徴遊び（つもりになって遊べるままごと遊びなど）をしたり、人の気持ちがわかったり、暗黙のルール、空気を読む等が関わってきます。想像力が弱いと初めてのことに對して、不安が大きくなり、何も考えられなくなってフリーズするということが起こります。また、段取りをすることが難しくなります。保護者の方にもおられますが、例えば「来週までに書類を提出して下さい」と伝えても、いつまでに住民票を、その次には源泉徴収を取りに行くということをプランニングできません。そのため、いつまでたって

も書類が出せないのです。これを実行機能の課題とといいます。

想像力が乏しいと、遊びの発想がなかなか広がらず、非常に限られた範囲で遊びのツールを見つけようとします。遊びが見つからないと、手持無沙汰になり、いろんなトラブルが多発しますので、いかに隙間の時間を減らしていくかということがポイントになります。自由な時間をどう過ごすか、遊びを一緒に考えて見つけてあげられるか、というところが支援の大事なポイントで、みなさんの腕の見せ所になります。

私は以前“こだわりはいろんなコミュニケーションを阻害する問題だ”と捉えていましたが、今は“こだわりがある方が生きやすいかもしれない”と思うようになりました。特性のある子どもは、パターンを作ることで不安から身を守り落ち着きます。だからこだわりを全て悪いと捉えず、支援の糸口、強みになると考えてください。こだわりがあることで、自分の好きな物ができうまく時間が使えているとも言えるのです。

⑤社会性の課題

相手がどう思っているかをうまく把握できず、人との関わり方が独特で友達関係を持つことがうまくできません。特に同学年の子と付き合えるかどうか、対等な人間関係が築けるかどうか大きなポイントになります。他者の気持ちや状況を察知できず人との距離感がうまくとれません。積極奇異型は、人との距離が近くいきなり触ったり、話しかけてきます。親しげに話すこと自体は問題ではありませんが、人間には適度な距離感というものがあるので、相手にとってはすごく違和感があります。積極奇異型は、関わらないと不安になるため、関わることで、不安を解消しようとし、とても親しげに見えますが、実は本当の意味で対人関係が良いわけではありません。二つ目は孤立型と言って、我が道を行くタイプです。相手がいまいが、自分のしたいことをするので、すぐわかります。一番わかりにくいのが、三つ目の受動型です。このタイプは大人しくて、言うとおりに動いてくれるので先生は困らない子

どもです。ところが本人はよく状況がつかめず、わからないから付いて行っているだけで「いやだ」も言えない状態です。受動型には、小学校の高学年になってから大爆発する人がいます。集団の中では大人しく、家では結構大変だったりします。家と園など場面によってかなり態度や行動が違っているので、分かりにくい子どもです。

昔、担当したケースで、保護者が「電車の中でこの子が前のおじさんを指さして、ブタ！と言うんです。慌てて口を押えました」と困っていました。太っていても「ブタ」と言っただけではいけないのが社会的判断ですが、それを言っただけでトラブルになります。この場合もわがままや勝手気ままなのではなく、相手の立場や視点をイメージしづらいためなのだ、と理解しなければいけません。

⑥コミュニケーションの課題

自分の思いを適切に相手に伝えられないというコミュニケーションの課題です。言語能力が低い言葉でうまく説明できなかつたり、相手の意図がくめないで話がかみ合わなかつたりします。また、非常に不安や緊張が高く、固まってしまうたり、困ってしまうと発信できなかつたりする場合があります。ヘルプコールが出せないということが一番困ります。「困っている」というサインがうまく出せないで、友達に嫌なことを言われていても「やめて」と返せません。受動型はまさにこれに当てはまります。自分が困って誰かに助けてほしいでもどう伝えてよいかかわからず、ストレスフルになります。何か困ったときどのように訴えたらいいか、ヘルプコールがうまく出せるようにしてあげてください。ヘルプコールは言葉でなくても、先生の肩をたたくとか、カードを出すとかいろんなやり方があるので、代替手段も含めて考えてあげてほしいと思います。ヘルプコールがうまく出せないパターンが続き、後々でメンタルヘルスの問題になって出てくる場合があります。

子ども自身に困り感（わからない、見通しががないなど）があると、アクセルを踏むタイプとブレーキを踏むタイプがあります。アクセルを踏む人

は、遊べなくて手持無沙汰だから、他の子にちょっとかき出して混乱させるとか、暴言を吐くなど、すぐ周りを巻き込んでしまいます。一方で、ブレーキがかかる子は、ちょっとした状況の変化に何も言えなくなって固まってしまう。私たちは生きていく上で行動のアクセルやブレーキを踏まなくてはなりません。それが適切に踏めればいいのですが、特性のある子ども達は状況に合わせてアクセル、ブレーキを踏むのが不得意で、急ブレーキ、急発進をします。また、家ではアクセル全開、園はブレーキというように、場面場面でアクセルとブレーキを大きく踏み分けるため家と園での様子が全然違うことになり、保護者と園の先生との捉え方が全く違うということも起こり得ます。場面での違いを互いが知り合うことは、子どもの課題を考える上で非常に重要です。特性とのマッチングで、場面によって状況が変わることがあるのだということを、知っておいてください。

『自閉症の子どもが見る世界』

ここで一つ動画を見てもらいます。(イギリスの自閉症協会製作：ショッピングモールに行った自閉症の子どもはどう見ているか、どう感じているか、という動画を見る。子どもは、音、におい、光、人の視線など様々な要因が刺激となり大きく混乱する。数を数えて安定しようとするが、ついにはパニックになってしまう)映像の子どもは特性の強い子どもですが、そこまで特性が強くなくても長い時間様々な感覚に晒されると近いことが起きます。今のビデオはわかりやすく出ている例だと思います。

氷山モデルと言われる図は発達障害を説明する時によく使われるものです。水面上に子どもの気になる行動が見えていますが、水面下に子どもの発達特性があるということがよくあります。ただ特性を持っていても必ずしも気になる行動になるのではなく、『レゴ博士』になったり『プラレール博士』になる子もいます。その違いは、生活環境の要因が大きいと思います。環境の騒がしさや狭さなどのファクターや周りの人たちの関わ

りの積み重ねがどうだったのかということが大きく影響してきます。ミスマッチすれば、気になる行動になるし、その子に合っていれば、気になる行動にならないということもあります。変えられるのは『周囲の大人・子どもの関わり』というファクターしかありません。そこを考え、変えていくのが支援だということです。皆さんたちがどう子どもに付き合い、関わるかということや、生活環境をどう整えるかということが支援のスタートになると考えます。

5. 発達特性のリスク

発達特性を、別の角度から考えると、内在性と外在性、学業上要因という3つの要因で整理できます。今日はその話はしませんが、保育の評価シート『TASP (タस्प) 保育・指導要録のための発達評価シート』でも、この内在性、外在性の考え方が使われ始めています。内在性というのは、例えば不安が高いとか、運動が不器用など自分自身が困ることです。内在化問題は本人自身を困らせる情緒・行動の問題のリスクを高めます。一方外在化は衝動性が高くて何か事故を起こしたり、攻撃して暴言を吐く等、周りの人を巻き込みます。結果として人を困らせる情緒・行動の問題のリスクを高めます。この内在化と外在化に加えて、小学校に行くとき学業や勉強がどう進んでいくかという学業上の要因も、考えていく必要があります。内在化、外在化の問題が大きいと、周囲の人から認知、評価してもらえないことが続き、怒られてばかりでストレスフルになります。そのためメンタルの問題につながりやすくなります。この内在化、外在化の問題は、園から小中学校、高校、そして社会人になるまで考えていかなければならない問題です。

5. 事例より

今までの話のまとめとして、1つ事例を考えたいと思います。

・S児 (5才1カ月)

園からは落ち着きがないこと、人の気持ちを考

えずに行動すること、友だちとトラブルになって押しついたり噛みついたりすることを相談されました。以前住んでいた町でも、やはり落ち着きがないと相談を受け、多動傾向という指摘がありました。この子は3歳までに仮名文字、アルファベットが読め、会話は年齢相応でしたが、場に関係ないことを話し、相手の話を集中して聞かせませんでした。じゃんけん、しりとり、足し算も出来て、トランプゲームが大好きで、家ではアニメのビデオを見続けるとのことでした。ポイントとして、新しい場面での緊張が高く、道路への飛び出しなどの衝動的な行動やテンションが上がりやすいということが見られました。それから記憶がすごく強くて、一回経験したことをよく覚えています。こういったところが特性です。

園に行くと「見通しが持てなかったり、場面の切り替え時にかんしゃくを起こしやすい。自分が遊んでいるおもちゃを他の子が触ると攻撃的な態度をとる」と相談されました。この園の保育形態は完全なフリーでほとんど設定がありません。子どもは園内を自由に移動できるため、担任は子どもの様子がなかなか把握できないようで、叱責が多く、言葉の指示が目立つといった印象でした。また園内は遊具や大型積み木が散乱していて、全体的に整理が出来ていないように感じました。整理整頓ができていないかどうかというのはポイントで、整理整頓ができていない時はいろんなことが起こりやすくなると考えてください。

3時間ほどその子の様子を見ていました。まず階段にあったフープを近くの子どもに投げつけるといった攻撃性の高さが見られました。でもカーテンを使ったかくれんぼが始まると、かくれんぼに参加します。かくれんぼをしているときは、遊びから外れることなく、ルールも守って楽しく遊べていました。かくれんぼのように枠組みのはっきりしている遊びでは、ルールを守って遊べました。目標が見える活動があれば認知能力が高いのでちゃんとルールを守って遊べます。かくれんぼが終わると何をしていいかわからず手持無沙汰で、注目を引くために他の子どもにボールを投

げつけます。目標が見えなくなり注目引きに走ったということです。相手が怒ったので注目引きは成功しました。次に、ままごとで遊んでいる子どもにもボールを投げました。ところがこの女の子はS児を相手にしませんでした。相手が反応しないとやりがいがないので、トラブルに発展しません。絵本を読んでいた子どもに、自分の方を向くように言いましたが、「いやだ」と拒否されました。それがS児の反応をさらに強化して、椅子を投げつけます。拒否的な反応を明確に示したり、叱責すると攻撃的な行動が非常に強まってきて、相手の反応を求め、混乱してくるようです。S児は刺激の多いことに対して過敏で、園の中の錯綜した環境の中では常にパニックになるのを我慢している状態で、何かのきっかけで爆発するのだと思います。椅子を投げたことを先生が注意しても、笑っています。これは本当に笑っているのではなく、不安や緊張が非常に高まっている証拠で本当の笑いではありません。その後は水遊びの邪魔をしたり、物を投げたり、注目を引こうとよくない行動の連鎖となりました。こういうときは早めに保育者が介入しないといけません。

ずっと行動を見ていると目標が見えている場面と見えない場面の落差が激しいということがわかってきました。一見すると多動で暴力的な子という風に捉えてしまいましたが、根本的には想像力の問題だと思います。

S児の検査を担当しましたが、検査には一生懸命取り組んで、しっかりできました。でも検査後保護者と話をしていたとき、妹と遊んでいると、遊びが展開できず巻き込み合いをして大げんかの殴り合いになりました。妹も後日相談につながり特性を持っていることが分かりました。言葉の受け答えの検査や語彙能力の検査は優秀レベルで、表面的ですが言語能力が高く見えます。私の言語聴覚士としての所見は第1次診断（言語発達全般）が発達障害の疑いで、第2診断（発音とか吃音とか話し言葉の障害）については問題はなく、特性の問題だと判断しました。検査など特定の枠組みのあるときと、フリーのとき（遊んだり生活

するとき)の落差がものすごくあるというケースでした。心理師も検査については平均発達だが、不注意の傾向があるなど特性が見られたため、自閉症、ADHDの可能性があるのではないかと見て取りました。当時は早く診断につながり、1回で自閉症スペクトラムと診断されました。診断名が付くことよりも、この子が生活のどこに困って、どこなら力を発揮できるのかというところを知ることがすごく大事なことです。このケースは、本人の特性と保育形態の要因が微妙に影響しあって良くないマッチングをしていました。自分が遊ぶテーマを見つけにくい環境だったため、環境整備が必要だということが言えます。園には「S児は見通しがつきにくいので、視覚的な手掛かりがかなり必要だ」と伝えました。自由保育という保育方針はそう簡単に変えられないこともわかります。ただ、保育形態は変えられなくても環境設定は工夫できます。また否定的な表現で本人に叱責をするというのも良くありません。「子ども同士は仕方ありませんが、職員は別の対応をしていかななくてはいけないだろう」と話しました。この事例のポイントは、明確な枠組みを持った活動や、視覚的な手掛かりがある場面では、もともと本人の持っている高い認知能力が発揮できるが、自由場面や理解できない状況になると不安や緊張が高まってしまうところです。自分が何をしたいかうまく選択できないし、相手が予期せぬ反応をするともものすごく混乱します。刺激が多い環境だということはよりその衝動を高めやすいため、まずは環境整備が必要だと思いました。後日談があつて、この子は別の保育園へ転園したそうです。すると人が変わったように大人しくなり、周りの環境がその子にマッチしたようです。特性が変わったわけではありません。これは非常に考えさせられたケースでした。

6. まとめ

発達の凸凹(でこぼこ)があるということは、得意な面や苦手な面にアンバランスさがあるということですが、それに適応上の問題が起きると

最終的に発達障害といいます。これが杉山先生(福井大)の言い方で、私も「特性があるから、すぐに発達障害と言ってしまうのはどうかな」と思っています。特性のある方々は世の中にたくさんいますが、適応上の問題がなければ発達障害とは言わないということです。今日は保護者の話はあまりしていませんが、子どもが1歳ぐらいから保護者の困りというのがだんだんはっきりしてきます。その子の持つ感覚特性などいろいろな要素が困った行動につながっています。保護者は子どもの癩癪や切り替えの付きにくさなどの対応に非常に参ってしまって、過度な叱責やほったらかしになって、最悪の場合虐待ケースとなってしまふことがあります。最近では保護者が、「子どもってこんな存在だよ」というイメージが低下しています。だから子どものやっていることに翻弄されるし、些細なことでもものすごく過敏になったり、ほったらかしてしまうのです。保護者自身が同じような特性を持っている場合もあり、そういう場合はコミュニケーションに気をつけなくてははいけません。

30～40年前の児童福祉センターが出来た頃は、課題に気づいたらすぐ診断して専門機関(療育など)で治療するという医療モデル型の考え方でした。ところが発達特性のある方が10パーセントいるというような状況となると、医療モデル型だけでは支援が維持できなくなります。そこで、地域の子育て支援の中から必要な方を発達相談・診断に送るという風になってきています。この地域子育て支援の中に皆さんの園での支援が含まれてきます。保護者はなかなか「専門機関へ相談に行く」とは言いません。検診を受けてすぐ納得して行く人もいますが、なかなかそう簡単な問題ではありません。微妙な子どもが多いので、地域の子育て支援の様相がとても重要だということを感じています。まずは気づきが大事です。専門機関へ相談されていなくても、子どもにとって適切な支援をしていく必要があります。しかしすぐに自閉症かどうかを決めるのではなく、まず“どういう特徴があつて、どういう風に付き合っ

てあげたらちょっとでも楽しいかな”と考えるのがスタートラインです。発達障害の子どもは周りの状況に大きく影響されるので、まずは物理的な生活環境を整理しつつその子との付き合い方を考えていくことが大切です。環境を整理している方が子どもは落ち着きやすいと感じます。皆さんが子どもの良きパートナーになり道しるべになるということが重要です。そして生活環境の要因がミスマッチしないように工夫してください。まずは大人がどういう風にその子に対応していくかということがスタートです。子どもは園の生活を楽しく過ごす中で、ポジティブな感情を持ちやすくなります。

今、保育現場では配慮を要する子どもがいろいろいます。外国にルーツを持つ、養育上の問題、経済的な問題、障害的な特性など、配慮を要する範囲が非常に広がって複合化しています。その中には保護者の対応が子どもとミスマッチしているケースが増えています。特性への支援がうまくいかないと家庭や学校、地域場面でいろいろな課題や困難さがでてきます。ここに支援を入れていかないといけません。子どもの困りを小さくしてあげないと自己評価の低下が起きてだんだんこじれてきます。

本田先生（信州大学）の図ではもともと持っている第一次症状（神経心理学的特徴:本来の発達特性）があり、これは治るとか治らないとかいう問題ではなく、その子どもが持ち合わせているものです。ところがそれが集団生活に入る頃から周りとの軋轢でこじれ始めると行動上の問題で出てきて二次症状（行動学的特性）となります。課題や困難が多くなるとそこに対して予防的介入をして、これ以上こじれないことが必要です。しかしさらにこじれると、今度はメンタルの問題（三次症状）になります。例えば引きこもりや行き渋り、最近では不登園もあって前倒しになってきています。三次症状までくると、専門機関の介入も必要になってきます。医療的なケアも含めて介入せざるを得ないケースもあるので、この一次症状、二次症状、三次症状と進んでいかないように

するのが支援の最大の目的です。

また、自閉症で特性を持った子どもでも、こじれないでうまく適応していくと、最適な社会性の伸び方をしていき、特性があってもユニークの範囲で社会に適応できる可能性が十分あります。ところが、こじれてしまい社会性の発達が低いと、社会適応の問題が非常に大きくなります。それをいかに抑止するかが大事なポイントです。

保育場面ではいろんな子どもたちがいます。皆さんにとって理解しがたい行動をとるかもしれないし、困らされるかもしれませんが、その背景には必ず意味があります。そして得意なこと好きなことに支援のポイントがあります。悪いことばかりやっているように思われますが、どういつきだしたらうまくいったのかということを見つけてみましょう。日ごろから“この子はこういうことが得意でいい”というところを見つけることが、支援のヒントとなり、そこから糸口が出てくる場合が結構あります。

最後に一言。私は学童の仕事をしてますが、園と学童との連携がもっともっと活発になってほしいと思っています。支援シートも学童に提出してもらえることが増えましたが、保護者を通しての情報なので、細かいニュアンスがつかめない場合も多いです。保護者の了解を得て、可能な限り園と学童とで連携をとっていただくと、その子の長い支援の道りをつなぐことが出来ます。皆さんの見ていた子どもたちが、学校だけではなく学童でどんな姿をしているかというのも見ていただきたいと思います。学校とは姿が違うことが多いです。学童での姿を見て連携し、共に考えていけたら良いかな、と思います。

7. 参考

英国自閉症協会が『自閉症の子どもが見る世界』を製作した動画はインターネットで見られます。

（『Can you make it to the end?』で検索）

令和3年度第3回、第4回共同機構研修会 令和3年6月14日、6月23日 於：京都市子育て支援総合センター こどもみらい館
--